

Title	土器の厚手薄手論を讀みて(歴史地理第四十二卷第二號)
Sub Title	
Author	國分(Kokubu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1924
Jtitle	史学 Vol.3, No.3 (1924. 9) ,p.116(459)- 116(459)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	餘白録
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19240900-0116

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

土器の厚手薄手論を讀みて(歴史地理第四十二卷第二號)

喜田貞吉博士と谷川磐雄氏の論争である。土器の厚手薄手論に對し、全く素人の予が横槍を入れるのは、チト變であるが、兎に角御参考までに述べてみる。我々が牛鍋をつく時の鍋を御覽なさい。此鍋と普通用ゆる鍋類とを比較してみると、鐵の厚さが割合に厚いではないか。厚いのは、牛肉を煮るさき、普通の火力よりも、より強い火力を要するからではないか。強い火力と厚い鐵鍋。狩獵部族の食料は、鳥獸肉の多いことは勿論であるから、従つて、魚類と比較して柔でない此鳥獸肉類を料理するさきは、強い火力が必要ではなかつたであらうか。若し、強い火力が必要とあれば、薄手器物よりも厚手器物の方が、割合に強い火力に耐えうるではないか。弱い火で長時間煮焼する時も、薄手よりも厚手の器物がよいではないか。尙山嶽に近い所は、雪が多くて寒氣が強いから、食料等を保存する上に於ても、凍の爲め、毀れ易い薄手の器物よりも、厚手器物の耐寒的なものを使用するのが便宜ではなからうか。又食物の保温等に關しても、薄手器物よりも、厚手器物の方が、よいではないか。即ち、習ひ性となつて、狩獵部族が、耐火的にして、且つ耐寒保温的な厚手式器物を用ひ。漁撈部族が、魚類を煮焼するには、割合に弱い火力でよいから薄手式器物を用ゆるやうになつたのではなからうか。以上、妄言多謝。

(大正十三年八月十一日 國分生)